

「長尾雨山とその交友」展の開催—大学博物館の活性化に向けて— シンポジウム記録

Symposium proceedings: The “Nagao Usan and his friends” exhibition - towards
the revitalization of university museums

松村 茂樹¹, 下田 敦子², 青木 俊郎³, 高塚 明恵³, 木村 淳⁴, 渡邊 顕彦⁵,
松田 春香¹, 戸田山 祐¹, 利根川 千枝子⁶, 廣野 朱音⁷

¹大妻女子大学文学部, ²大妻女子大学人間生活文化研究所, ³大妻女子大学博物館, ⁴大妻女子大学非常勤講師,
⁵大妻女子大学比較文化学部, ⁶大妻女子大学大学院博士後期課程, ⁷大妻女子大学大学院修士課程

Shigeki Matsumura¹, Atsuko Shimoda², Toshiro Aoki³, Akie Takatsuka³, Jun Kimura⁴, Akihiko Watanabe⁵,
Haruka Matsuda¹, Tasuku Todayama¹, Chieko Tonegawa⁶, and Akane Hirono⁷

¹The Faculty of Humanities, ²Institute of Human Culture Studies, ³Museum, ⁴Part-time lecturer,
⁵The Faculty of Comparative Culture, ⁶The Doctoral Program, ⁷The Master's Program, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：長尾雨山，展覧会，大学博物館，活性化

Key words : Nagao Usan, Exhibition, University museums, Revitalization

抄録

令和 7 (2025) 年 1 月 14 日～2 月 28 日，大妻女子大学博物館特別展「長尾雨山とその交友—書画文墨趣味ネットワークの人々」が，令和 6 年度人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「長尾雨山とその交友」展の開催—大学博物館の活性化に向けて」（課題番号：K2416 研究代表者：松村茂樹）の助成を得て，大妻女子大学博物館の主催により開催された。

また，会期中の 2025 年 2 月 20 日（木）13:00-14:00 に大妻女子大学博物館でギャラリートークが，14:30-16:00 に大妻女子大学 G311A アクティブラウンジでシンポジウムが開催された。

シンポジウムでは，展覧会参観および大妻女子大学メディア教育開発グループの協力により制作された解説動画視聴そしてギャラリートーク参加の感想を自身の研究に絡めて各自発言した後，来場者を交えたディスカッションがおこなわれた。本報告はその記録である。

はじめに

令和 7 (2025) 年 1 月 14 日～2 月 28 日，大妻女子大学博物館特別展「長尾雨山とその交友—書画文墨趣味ネットワークの人々」が，令和 6 年度人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「長尾雨山とその交友」展の開催—大学博物館の活性化に向けて」（課題番号：K2416 研究代表者：松村茂樹）の助成を得て，大妻女子大学博物館の主催により開催された。

長尾雨山は，1903 年～1914 年の上海滞在中，呉昌碩（1844-1927）をはじめとする中国の文人と交流し，当時最新の文墨趣味を日本に伝え，それに憧れる人士を「書画文墨趣味ネットワーク」で繋いだ。

この展覧会は，京都の安見昌幸氏より大妻女子大学博物館に長尾雨山「草書七絶書軸」が寄贈されたのを機に，長尾雨山と夏目漱石，岡倉天心，内藤湖南，富岡鉄斎，犬養木堂そして呉昌碩らその交友の書画および資料を展示することにより，長尾雨山が形成した「書画文墨趣味ネットワーク」の意義と影響力を明らかにするものである。展示開催時期としては厳しい冬季にもかかわらず，来館者数は 532 名に上り，東京大学教授板倉聖哲氏，京都大学准教授呉孟晋氏，筑波大学名誉教授角井博氏をはじめ，専門分野の来場者も多かった。また，会期中の 2025 年 2 月 20 日（木）13:00-14:00 に大妻女子大学博物館でギャラリートークが，

14:30-16:00 に大妻女子大学 G311A アクティブラウンジでシンポジウムが開催された。

シンポジウムでは、展覧会参観および大妻女子大学メディア教育開発グループの協力により制作された大妻女子大学博物館特別展「長尾雨山とその交友—書画文墨趣味ネットワークの人々」解説動画 Part1「長尾雨山について」(解説: 松村茂樹)

(Part2「展示作品について」(解説: 青木俊郎, 木村淳, 松村茂樹) は本稿執筆時点制作中) 視聴そしてギャラリートーク参加の感想を自身の研究に絡めて各自発言した後、来場者を交えたディスカッションがおこなわれた。本報告はその記録である。

シンポジウム発言内容

松村: 皆さん、こんにちは。令和 6 年度人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「長尾雨山とその交友」展の開催—大学博物館の活性化に向けて」(課題番号: K2416 研究代表者: 松村茂樹) シンポジウムにお越しくださり、ありがとうございます。今回は、共同研究者の皆さんに、大妻女子大学博物館で開催しております「長尾雨山とその交友—書画文墨趣味ネットワークの人々」展およびその解説動画を見ていただいて、その感想または、ご自分の研究に絡めた話題をご発表いただき、後ほど来聴者の方々と交えたディスカッションもおこないます。では早速、共同研究者の発表に移らせていただきたいと思います。まず、木村先生からお願いいたします。

木村: 大妻女子大学非常勤講師の木村でございます。よろしくお願いいたします。長尾雨山は中国に日本の教科書の編集技術を伝えましたが、ここでは雨山が日本において教育の分野でどのような活動を行っていたのかということをご紹介したいと思います。今回の展示品に西村天囚「松茂山莊記草稿軸」という作品があります。ここには数名の人物による、西村が漢文で書いた草稿に対する修正案が書き込まれており、長尾雨山や西村天囚と同じく、東京大学の古典講習科にいた人たちの名前が見えます。たとえば、『史記会注考証』で知られる滝川亀太郎は、明治 20 年代に文部省に勤務し、漢文の教科書の検定を行いました。雨山は明治 32 年から文部省に入り、漢文などの教科書検定を担当しました。当時の教科書への修正意見の一部は、検定に用いられた教科書に添付された付箋や、教科書への書き込みなどで現存しています。口頭で

のやりとりは分かりませんが、残された資料から判断すると、雨山の検定の基準というのは、他の漢文教科書の検定に携わった人達と同じく、生徒が漢文を学ぶにあたって教材の難易度や配列などが適切かどうかといったものでした。戦前の教科書検定というと検閲というイメージがあるかもしれませんが、明治 20 年代から 30 年代にかけては、後の時代と比べてかなり活発に教科書改革が進められた時期であり、雨山も出版社の試みを否定せずに検定を通過させていたので、結果的には出版社の編集上の改革を後押ししたのではないかと思います。滝川亀太郎や長尾雨山などの漢学者たちが教科書の発展などに果たした役割というのは、忘れてはいけないと思っております。

松村: ありがとうございます。一通りご発表を終えてから、ご質問等をいただければと思います。では、利根川さん、お願いいたします。

利根川: 利根川千枝子と申します。よろしくお願いいたします。この度は、大妻博物館で「長尾雨山とその交友」と題しまして特別展が開催されました。これに関連いたします本シンポジウムにおいて、私は、中国文人呉昌碩が展示品中の作者に刻した印についてお話しいたします。

雨山と交友の深かった呉昌碩は、長尾雨山・王一亭・内藤湖南・小栗秋堂・犬養木堂・柚木玉邨・富岡鉄斎に雅印として、号、字、姓名、室号、成語などを刻しています。これらの印には、側款の記されたものもあります。側款は、印材の側面に刻者が刻む落款です。

これらの印文と側款について、いくつか取り上げて観ていきます。呉昌碩は生涯にかけて自用印を刻していますが、早期に多くありますので、その中から二顆を取り上げます。

呉昌碩は、[俊卿印信]と自身の名を刻した印に側款「庚辰(1882 年)九秋。兩疊軒において刻す。昌碩」を記しています。呉昌碩三十七歳の時で、呉雲(室号 兩疊軒)の元に寄寓していた時のものです。[缶廬主]と刻された印の側款は「私は一つの瓦缶(土器の甕)を得た。なんと三代(夏・殷・周)の物である。古朴で愛おしい。そこで、それに因んで廬の名とした。壬午(1882 年)夏。倉碩。」です。呉昌碩三十九歳の時で、価値のある瓦缶を手に入れて、自身の室号を「缶廬」としたことがわかります。この瓦缶は友人である金傑から贈られたものです。

長尾雨山の雅印は十二顆見出しました。名の〔甲〕を刻した印に記された側款は「長尾先生が刻印を求めた。昌碩。」です。〔雨山居士寶之〕（雨山居士これを宝とする）と刻された印があります。これは、雨山が書画・印・骨董品を保存する箱などに鈐印したものと思われます。雨山は、呉昌碩が刻した印を大切に、会心の作に鈐印したといえます。上海から帰国した雨山は呉昌碩と書簡を交しています。刻印について次のようなやりとりがあります。呉昌碩は、雨山に対して「あまりではよくないけれどもらってください。」と刻した印を送ります。雨山が謝礼を送ると「そんなつもりで送ったのではない。」と現金を送り返しています。お二人の人となりと親密な関係が窺えます。

犬養木堂の雅印は八顆見出しました。〔寶蘭亭齋主人〕と刻された印があります。「寶蘭亭齋」は木堂の室号です。この印の側款は「木堂先生は定武本蘭亭序を手に入れた。それに因んで書齋を寶蘭亭齋と名付けた。癸丑（1913年）涂月（12月）。呉昌碩が併せて記した。」です。定武本蘭亭序は、東晋の書家王羲之が書いた蘭亭序を唐の書家欧陽詢が臨書したものを石に刻して拓をとったもので名帖の一つです。木堂はこれを手に入れて「吾が家の墨宝第一」として愛蔵しました。〔木堂秘笈〕と刻された印の側款は「丙辰（1916年）四月。老缶」です。呉昌碩が刻した年月が記されています。秘笈は、書物を秘蔵する箱、または、大切に保存された書物のことです。木堂は、入手した定武本蘭亭序を含めて貴重な書物・文物などを収める箱などに鈐印したものと思われます。

柚木玉邨については六顆見出しました。雞血石に〔濯足扶桑〕と刻された印があります。この句は唐代の司空図の詩にあります。濯足は世俗を超脱する意、扶桑は日本の意があります。これに記された側款は「玉邨先生は、日本の岡山倉敷の人である。遠くより雞血石五顆を寄せて刻印を依頼した。甲寅（1914年）六月。呉昌碩が上海で記した。七十一歳の時である。」です。雞血石は鶏の血液のように鮮やかな赤い色をした美しい石です。中国特産品で印石三宝の一つです。呉昌碩は、雞血石を送って刻印を依頼した玉邨に対して、印文〔濯足扶桑〕を通して日本の風流な方と言っているかのようにです。他の雞血石四顆には〔自賞〕〔惟性所宅〕〔半研冷雲〕〔蘆中人〕と印材に適う風雅な句が刻されています。

富岡鉄斎の雅印は三顆見出しました。〔東坡同日生〕（東坡と同日に生れる）と刻された印があります。奇縁にも鉄斎は宋代の文人蘇東坡と同じ月日、旧暦12月19日生れでした。鉄斎は、蘇東坡を敬愛し詩文書画に学びました。これに記された側款は「鐵齋先生之を正して下さい。丁巳（1917年）二月。老缶。年は七十四歳。」です。呉昌碩の鐵齋に対する尊敬の念が見えます。

呉昌碩の印文、側款文を見ますと依頼者の状況や心情を理解することに努め、敬意を表していることがわかります。印影からは、古典の研究に励み自己の芸術性を確固たるものに築き上げたことが窺えます。このような呉昌碩の魅力に惹かれて多くの名士が刻印を求めたのだと思います。以上です。ありがとうございます。

松村: ありがとうございます。では、廣野さん、よろしく願いいたします。

廣野: 廣野と申します。よろしく願いいたします。私は、「長尾雨山とその交友」展、およびその解説動画を見ての感想をお話ししようと思います。展示と解説動画を見て、長尾雨山は、中国の文人や日本の人士など様々な人々と交流していたことから、人とのつながりをとても大切にしていた方だと思いました。特に呉昌碩とは、隣人として親密に交流したことで、呉昌碩から最新の文人趣味を学ぶことができ、それを日本に伝えることができたことから、隣人と親しく交流することの良さに気付きました。近年、インターネットなどが普及し、個が重視される時代になったことで、かつては当たり前だった親密な隣人関係、近所付き合いというものは希薄になっているかと思っています。特に都市部では、隣人との関わりが、ほとんどないということもあるかと思っています。私自身は東京で生まれ育ちましたが、隣人とあいさつすることはあっても、深く関わることは今まではありませんでした。隣人と深く関わらなければ、隣人同士の人間関係のトラブルやストレスから解放されるため、隣人と親密に関わる必要はあまりないと思っていましたが、長尾雨山が呉昌碩と隣人として親密に交流したことで、最新の文人趣味を学ぶことができたということを知り、隣人と深く関わることで得られることもあるのではないかと考えるようになりました。長尾雨山のように、多くの人と関わることで、自分をサポートしてくれるような人が増え、自分のチャンスも増えることで、人

生がより豊かになっていくだろうと思いました。また、長尾雨山と呉昌碩が国籍や年齢が異なっているながらも、親しく交流できたのは、二人がフラットな関係で互いの違いや価値観を認め、尊重し合っていたからこそ、できたことではないかと思いました。私は台湾のサービス文化について研究しているのですが、台湾のお店では店員はお客さんに対してフレンドリーに接するという特徴があります。これは、店員とお客さんの間には上下関係がなく、フラットなヨコの関係を築くことができていくことが関係しているのではないかと考えています。台湾では、人同士がフラットな関係を築く社会が形成されており、人々はヨコに繋がっています。以前台湾に留学した際に、台湾の人々はフラットな関係を築いていると感じる場面が多くありました。例えば、大学の授業では、学年や年齢、学生か教授かといったことは関係なしに、自分の意見を言い合い、他者の意見も尊重していてフラットな関係を築いているようでした。私は、台湾の人たちのように、人とフラットな関係を築くことが重要だと考えています。長尾雨山は他者を尊重し、人とフラットな関係を築くことができたため、様々な人々と交流することができたのかと思います。その結果、最新の文人趣味を日本に伝え、「書画文墨趣味ネットワーク」を形成することなどの功績を残すことができたと思われるため、他者を尊重して、人とフラットな関係を築くことの重要性を改めて感じました。長尾雨山とその交友を通して、人とつながる大切さに気づき、人との関わり方などを考えるきっかけになりました。以上で発表を終わります。

松村: ありがとうございます。青木さん、お願いいたします。

青木: 大妻女子大学博物館学芸員の青木と申します。今回の展示の博物館側の担当者を務めました。松村先生・木村先生と一緒に1年以上かけて準備してきました。今回の展示を開催しております。展示を担当してきた中で感じた課題について、2点述べさせていただきますと思います。

第1点目は、人間関係・ネットワークの表現方法についてです。今回の展示は、松村先生のご研究を基に内容を構成して開催しているのですが、展示として表現をする際に、もう少しうまくできたのではないかと、という反省があります。具体的に述べますと、松村先生がご収集された資料を基に

展示構成を組み立てておりますので、展示資料の内容から、雨山のネットワークの実相や人脈の幅広さというのは表現できていたかと思います。一方で、雨山の人間関係の特色については、もうすこし工夫すれば、より理解を深められるような情報を提供できたのではないかと考えています。例えば、雨山がネットワークの中で関係した人物には、年齢差がかなりあります(以下、年齢差は生年からの概算)。雨山から見て副島種臣は36歳上、藤沢南岳は22歳上です。また呉昌碩も20歳上ということで、雨山からは一回り以上離れた世代です。雨山と同世代では、岡倉天心(2歳上)、正木直彦(2歳上)、山本竟山(1歳上)、柚木玉卮(1歳下)らがいます。年下では、富岡桃華・庄司杜峯は9歳下ということで、雨山の交友関係は、広い世代にまたがっています。こういった情報を人物の在世年表パネルで紹介することで、人間関係についてより理解がしやすかったのではないかと、という反省点があります。また、関係人物の中には、実業家、漢詩人、漢学者、政治家など様々な属性の人物がいます。そういった人物の分類図・相関図を作って、人物の情報を整理して紹介できれば、ネットワークの特色がわかりやすかったのではないかと、ということが1点目の課題です。

次に2点目の課題です。ネットワークの時代的な変遷・質的変容についてです。松村先生の『長尾雨山研究』(研文出版、2024年)の中で、大正年間と昭和年間に開催された寿蘇会・赤壁会を比較すると、参加者が異なっているという点が指摘されています。大正年間は、漢学者・漢詩人を中心に、各界の人士が集まってネットワークを形成していて、実業家、政治家が参加していました。一方、昭和12年の会では、書家・篆刻家・実業家が多く参加しており、その中には雨山の教えを受ける人物が多くいました。以上のように、参加者の変化・会の質的変容・雨山の役割変化が指摘されていますが、このような変化・変容については、独立した解説パネルなどは作成しておらず、わかりやすく紹介できませんでした。また、雨山の空間的移動という要素があります。長尾雨山は香川に生まれて、東京、熊本、上海、京都と、居所を複数回変遷させています。雨山の移動によって、関係する人物と雨山との物理的距離が近くなる・遠くなるということが起こり、その結果、関係性に変化が生じていたということが想定されます。そういった移動に

関わる情報を、年表や地図を作成して詳細に紹介することができなかったというのが、反省点です。次回、またこのような展示に関わらせていただくことがありましたらば、以上述べた内容に留意しながら展示を構成していきたいと思いました。私からは以上です。

松村: ありがとうございます。松田先生、お願いいたします。

松田: 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科の松田と申します。朝鮮半島を中心とする、東アジアの国際関係史を研究しております。この「長尾雨山とその交友」展を拝見しまして、本当に素人で恐縮ですが、感想を述べた後、二点ほど質問させていただきたいと思います。今回の展示も、松村先生のご研究もそうですが、長尾雨山の足跡とその功績、また彼を中心とする文人たちの国際的なネットワークを丁寧に検証・考察されたものです。皆さんもお感じになられたかと思いますが、私たちも、あたかも同時代を旅したかのような感覚を持つことができたと思います。展示はもちろん、松村先生の解説動画を通じてもそのような感覚を強く持つことができて、大変興味深いものでした。

先ほどギャラリートークでもお話がありましたが、明治の知識人が漢学の素養がある人たちが多かったということですが、これまで私自身もその方々の中国への旅行記に関する研究をいくつかを読んだことがあります。中国に対する認識には、中国は文明的に劣っているというものと、また長尾雨山のように中国への憧憬を持つものという二つがありました。

当時の時代背景を考えてみますと、明治時代以降、日本はほぼ10年ごとに戦争をしており、その戦争の原因の一つは私が研究対象としている朝鮮半島を巡る争いでした。ご存じのとおり、長い間、清と朝鮮は朝貢冊封関係にあったため、朝鮮半島を巡って、1894年には日清戦争、1904年には日露戦争が起きました。1914年には第一次世界大戦に日英同盟を理由に日本も参戦しました。

このような日本を取り巻く国際環境のなか、先ほど申し上げたように、中国旅行に行った日本の方々はたくさんいらっしゃいます。長尾雨山が上海に長期滞在したからこそなし得た、国際相互交流がありました。その交流は日中両国間だけでなく、松村先生のご研究でもご指摘の通り、米国に

まで渡って文化交流をなし得たということの素晴らしさを改めて痛感しました。また、先ほど犬養毅の話もございましたが、犬養が中国通だということは知ってはいましたが、今回犬養の書を実際に拝見しまして、その素養を初めて目の当たりにしました。五・一五事件(1932年)で殺害されたということは、その後の日本の歩みを見ますと非常に惜しかった、と改めて感じました。

このような時代背景がありながら、長尾雨山が国際交流をできたことを考えますと、細かい点で恐れ入りますが、先ほど高島屋百貨店のお話がありましたが、政府や民間企業による長尾雨山に対する金銭的支援がどのようなものがあったのかについて、お伺いしたく存じます。

また、純粋に文人たちの交流であり、フラットな関係だったということも考えられますが、先ほど木村先生検閲や思想統制という性質のものではなかったとおっしゃいましたが、日本政府の政策の影響をどのように排除できたのかについて、気になりました。あと、実際に作品をご覧になった先生方に、ぜひお伺いしたいのですが、長尾雨山がどのように、非常にフラットな関係を呉昌碩などと築いていたと思われますが、長尾はどのような中国認識を持っていたのでしょうか。彼の中国認識が交流のあった日本の文人、ひいては日本社会にどのような影響を与えたのでしょうか。以上二点の質問についてお答えいただけると、助かります。

松村: ありがとうございます。ご質問は後ほど取り上げさせていただきます。では、渡邊先生お願いいたします。

渡邊: 比較文化学部の渡邊と申します。この度は特別展「長尾雨山とその交友」開催おめでとうございます。またシンポジウムにも加わらせていただきありがとうございます。

展覧会を見学し、雨山の文人ネットワークが中国古典の伝統を近代日本において継承してきた様が深く認識できました。自身が文人であられる松村先生が学識と情熱を惜しむことなく注ぎ込んできたからこそ伝わってくる熱いメッセージが感じられる展覧会でした。

私自身の専門はいわゆる西洋古典、要するに古代ギリシャとローマの文芸伝統なのですが、これらは発生と継承において東アジアの古典伝統と大きく重なるところ、同時に周辺部で色々異なるところ

ろもあると常々感じています。二つ大きく重なる
ところとして時代と人的ネットワークがあります。
まず時代ですが、漢詩作成が近代の東アジアでも
行われていたように、ラテン語、それからより限
定的ではありますが古代ギリシャ語による作詩も
ヨーロッパおよび広い意味での西側で、1800 年代
までいわゆる高等教育を受けた層では盛んに行わ
れていました。大英帝国の植民地官僚登用試験で
古代ギリシャ語の作詩が 19 世紀末まで必須であ
り、このための予備教育を受ける世界各地の、イ
ンド人を含む若者たちがホメロス等古代詩人をそ
の原文を真似られる程度まで読み込んでいたこと
は最近の調査でも明らかにされています。ただこ
のような古代語使用の伝統、これは実は今でも
細々と続いてはいますが、ここ 100 年あまり低調
になったおそらく一番大きな理由が教育と社会全
体のいわゆる近代化、産業革命と連動するあるい
はそれから波及した巨大な意識の変革にあるわけ
ですが、この変革は西ヨーロッパで始まり他地域
に波及していったので、教養層による古典語を使
った活発な作詩作文やそれを使った交友のような
文化の終焉も東アジアと欧米で数十年のタイムラ
グがあるのかなというのが私の印象です。

二つ目の点、交友関係ですが、今回の展覧会から
も深く感じられたのは、生きた古典教養の継承に
は人的ネットワークが歴史的に重要であった、と
いうことです。今回は雨山を中心とする文人ネッ
トワークの産物として書画帖もいくつか展示され
ていましたが、近世西洋ではこれに似た *album
amicorum*（「友人たちのアルバム」）というものが
あります。これは 16 世紀以降、人文学者たちが出
会った人々に詩文や絵を依頼したノートの類でヨ
ーロッパの文書館等に大量に残っています。私自
身、近世にラテン語を書けた少数の日本人たち
について調査していますが、例えば最近ヨーロッパ
の研究者から知らされたものとして 17 世紀の日
本人荒木トマスがフランドルス出身の人文学者に
ローマで出会った際、後者の *album amicum* に書
き残したラテン語の詩があります。内容はともか
く、文体は完全に古典に則った大変優雅かつ学識
が感じられるものです。

思うに東アジアでも西洋でも、古典の学識、これ
は古代の文献を原文で読むだけでなく、それと似
たものを常時書く、要するに古代人の思考を、す
でに古代ではない世界において再現できるまでに

自分のものとする、ということですが、この伝統
はぎりぎり近代まで高等教育を受けた層の中で広
く生きていました。このような伝統が良かったの
か、それとも近代化を阻害する、自由な発想を阻
む、階層間に垣根を作る障害物であったのか、諸
説あるところではありますが、少なくともこのよ
うな教養を単に学ぶあるいは職業として研究する
のみではなく、真にこの伝統を生きている人々の
精神世界はそれなりに多様かつ豊かなものであ
ったでしょう。また雨山の交友や履歴からもこれは
確認できると思うのですが、少なくとも近代以降
の国粹主義や自民族ファースト主義を超える、国
際的なものであったことは確かでしょう。今回は
幅広い、深い、そして個々人だけでなく人々のネ
ットワークの中で活かされる古典教養の価値を再
認識できるイベントでもあったと思います。あり
がとうございます。

松村：渡邊先生、ありがとうございます。戸田山先
生、お願いいたします。

戸田山：大妻女子大学文学部コミュニケーション
文化学科の戸田山祐と申します。私の専門はアメ
リカ史です。そう申しましても、授業では、日米関
係の歴史も含めた近現代史のさまざまなことにつ
いて教えております。さて、今回の共同研究にお
招きいただきありがとうございます。そこで、
私の専門あるいは、専門分野に関わって授業で話
したりしていることと、今回の企画との関係を踏
まえて何かコメントをできればと思いまして、展
示を拝見し、先生方のご説明を伺って興味深かつ
たことについて少しお話しさせていただきます。
そこで、近代における百貨店、デパートと、この書
画文墨趣味の関係について報告したいと思います。
今回の展示の中に、高島屋美術部による長尾雨山
の展覧会の展覧会の図録である『天璞集』という
ものがございました。1919 年刊行ですから大正期
のものですが、この史料は、私には大変興味深く
感じられました。それは、なぜかと申しますと、日
本において百貨店が持っている文化的な意義を含
め、日本のデパートの特色と大いに関わっている
ものだったからです。先ほどのギャラリート
ークで、松村先生からもご説明がありましたが、
高島屋の大阪の支店は、さまざまな画家や書家の
作品を展覧会という形で展示し、なおかつ、販売
する場であったということですね。例えば、近代
日本の文人画家である、富岡鉄斎も、実は高島屋

が売り出したことで有名になった。それから、まさに同時期の中国の文人画家・書家である呉昌碩の作品を展示し販売していた。あるいは、横山大観や上村松園といった、誰もが知っている近代日本画家の作品というものも、そこで展示され、そして売られていたということを伺いました。そこで、やはり考えなくてはならないのが、近代資本主義が持っている性格の一つである、さまざまなものを商品化し何でも店で売るという側面です。1919年のことです。日本にデパートというのが現れてまだ間もない時期から工芸品と並び美術品も売られていたというのが興味深いと思います。それから、単に売っているだけじゃなく、展覧会を催していたということが重要なのでしょね。ギャラリーの役割もデパートが果たしていたということは、非常に興味深いと思います。日本におけるデパートの展開は相当にアメリカ合衆国からの影響を強く受けたものです。ですから、日米関係の歴史を扱った授業では、私はこの事例をよく紹介するのですが、デパートメントストアというのが欧米で現れるのは19世紀後半で、1870年代以降になるとヨーロッパの各地、それから南北アメリカ各地に、大都市であればデパートが立地していくわけです。日本では、1905年、つまり明治38年の1月に三越、当時の越後屋呉服店が、『東京朝日新聞』に「デパートメントストア宣言」という広告を出します。この明治38年の正月の広告で、今後はますます多様な商品を扱っていきますということを三越はうたっております。以下、原文を引用します。「当店販売の商品は、今後一層其種類を増加し、凡そ呉服装飾に関する品目は、一棟の下に、御用弁相成候様設備致し、結局米国に行われるデパートメント・ストアの一部を実現可致候事」。この後、日本の新聞においても、まさにこの広告が掲載された『東京朝日新聞』がそうですが、デパートというものが何なのか、それは一体どういう業態なのかということについての紹介記事が載るようになります。例えば、『東京朝日新聞』は、このデパートメントストア宣言の翌年の1906年10月に「小売業の革命」という特集連載企画を組みまして、そこでかなり詳細に、当時のアメリカ合衆国のデパートの在り方を紹介しています。そこで強調されるのが、デパートというのは単なる小売店の集合体ではなく、一つの企業の中に、複数の部門、つまりデパートメントがあって、各々

役割を分担しており、各部門はそれぞれ専門の商品を仕入れて売っている場所であるということです。近代的な大企業として、当時小売業の最先端にあったデパートが、そのような形で紹介されています。また、そこでは美術品を含めていろいろなものが売られていると書いてあります。記事の表現を引用すると、「ほとんど人生の需要を一手で供給するありさま」であるというわけです。ところが、商品をいろいろ仕入れて売るといって、消費面での需要を一手に引き受けるだけではなく、日本においてはかなり早い時期から、人々の文化的な興味関心を満たす役割、つまりはギャラリーとしての役割もデパートが担っていたといえます。これは非常に興味深いことだと思います。先ほど申し上げましたが、日本ではデパートの草創期から、このような役割を、少なくとも高島屋の大阪の支店は果たしていたわけです。このような性格は、同時代の欧米のデパートにもあったようですが、文化的な催しを行う場として、そして文化の拠点としての役割は、日本の百貨店においては特に顕著であったのかもしれませんが。今回の企画展はさまざまな分野に関わるものだと思いますが、経済史、あるいは経営史や商業史も多大な示唆を受ける内容の展覧会であったという感想を抱きました。

松村：戸田山先生、ありがとうございました。

松村からも発表させていただきます。今回の展覧会、「書画文墨趣味ネットワークの人々」という副題が付いておりますが、長尾雨山が、これだけの人たちをネットワークでつないだというのは、すごいことじゃないかと思っております。どうして雨山はこのようなことができたのでしょうか？それは、長尾雨山が謙虚な人だったからと考えております。先ほど廣野さんから、サービスにおけるコミュニケーションについての発表がありましたが、人は高慢になっておりますと、なかなか人とつながれません。そういった中で、雨山は謙虚になり、別の人を立てて、自分はその後ろに退きながら、物事を進めていく方法を取っております。先ほどギャラリートークで紹介しました寿蘇会でも、富岡謙蔵を前に立てております。また、木村先生が解説くださいました商務印書館の教科書におきましても、一緒に上海に行った、小谷重という元文部官僚をいつも前に立てて教科書編纂をしております。そして、雨山が上海で創設した詩会に

ついても、詩詞壇耆宿と称された劉炳照を前に立て、さらには、上海で古書画展観雅会という古い書画を皆で持ち寄って展示鑑賞する会を開いているのですが、これも当時上海で佐佐木医院という大きな病院の院長をしていた佐佐木蘇江（金次郎）を、共同主催者として自分よりも前に立てています。平安書道会においても、ギャラリートークで申しあげましたように京大総長の荒木鳳岡を会長にし、自らは副会長として進めています。これはなかなかできることではなくて、人間、私を含めまして、やはり自分が前に出たいというのが普通なのでしょうが、雨山はもともとこういことができた方だったようです。

どうして雨山はできたのでしょうか？ それは雨山の生家が大いに関係しているのではないかと考えています。雨山の生家は、讃岐高松藩の公子松平頼該のお側役を祖父の代から務めていました。頼該は高松藩の藩主の家の当時は長男（兄二人は早世）として生まれながら藩主の座に就くことなく、高松の一角にある亀阜荘という邸宅で過ごした人物です。金岳という号がありまして、皆から慕われて金岳公子と呼ばれていた方ですが、藩主である弟を立てて、自分が表に出ることは極力控えるわけです。そして学問に邁進し、文化的な催しなどを皆と楽しむというようなことをしていました。そして最晩年、病床に伏している中で、高松藩が朝敵の汚名を着せられるという最大の危機を迎えます。鳥羽伏見の戦いに幕府側として加わったことからでしたが、実は高松の松平は水戸家から出ています。水戸家は特別な家で、徳川家康が御三家を作った際、尾張と紀州は、本家から跡継ぎがいなくなったときに跡継ぎを出すよう命じましたが、水戸だけは、もし朝廷と争うことがあった場合には、幕府側につかずに朝廷側につくよう初代藩主の徳川頼房に強く言い付けたのです。もし幕府が朝廷に滅ぼされた場合も水戸徳川家が残るという深慮遠謀でした。頼房は、それを子孫に伝え、水戸家は勤皇の家になりました。徳川最後の将軍である徳川慶喜も水戸家の出身です。当然のことながら、幕府よりも天皇を大事にするのですから、将軍になるやいなや、江戸城を捨てて京都にはせ参じるわけです。二条城で、天皇を毎日拝礼しながら暮らし、大政奉還をしてはどうかという声が上がると、当然のこととして、大政奉還をしました。そういった勤皇の家柄である水戸家

出身の高松松平が朝敵であるはずがないという信念を頼該は強く持っていたのです。そして、ギャラリートークで木村先生が紹介された藤沢南岳と共に決死の覚悟で、幕府側につこうとした家老二人を切腹させて、朝敵の汚名を晴らし、その後、安心して亡くなったのです。今も高松の方々、頼該公のおかげで高松が救われたという思いを持っていて、皆が尊敬している。この松平頼該の側近中の側近として、同じ邸宅の敷地内に住んでいたのが、長尾雨山の祖父であり、父であり、雨山もその家で生まれたのです。ですから、松平頼該の謙虚に、日頃は表に出ずに、ここぞというときには大きな仕事をするという精神を雨山は生まれながらにして持っていたのではないかと考えるのです。そういった家に生まれた雨山は、謙虚に物事を進め、そして、皆を繋ぐことができたのではないのでしょうか。

今回、このようなことを発見し、自分も見習わなきゃいけないと思われた次第です。ありがとうございます。

今日、京都大学人文科学研究所の呉孟晋先生が来てくださっております。呉先生、ご感想をいただけると幸いです。

呉：ご紹介にあずかりました京都大学の呉と申します。本日は、展覧会を見ようと思って、全くギャラリートークのことを知らずにお伺いしたところ、偶然にも、ギャラリートークとこのシンポジウムを拝聴することができまして大変うれしく思います。展覧会に関しては、松村先生が長尾雨山研究の第一人者でいらっしゃいますので、私からは何も申し上げることはありません。さまざまな新資料から多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございます。つくづく申し訳なく思っていることがありまして、前の職場の京都国立博物館には長尾雨山の書画コレクションがあることから、私が在籍したときにご子孫の方から自宅にある雨山関連の資料も合わせて整理してほしいというご依頼を受けておりますが、それからすでに10数年たってしまいました。いまま京博で保管しておりまして、整理の成果を早々に公開して、ぜひみなさまにご活用いただきたいと思っております。ただ、思いがけず博物館を離れることになってしまいまして、なかなか広く公開するまでにはいたっていません。いまは非常勤のかたちで館に関わっておりますので、少しでも早く段階的にで

も整理を終えて寄贈手続きに移して、公開に結びつけてゆけるように努力してまいりたい、そういう思いを強くいたしました。あともう一つ、今回の展示が共同研究のご成果であるうえに、さらにこのようなシンポジウムにつながっていることは、長尾雨山という人物が現在の細分化された学問領域や一つの視点からだけでは捉えることができない、多彩な活動を展開した文化人であることを示しているように思います。私は中国絵画を専門としておりますので、どうしても中国の書画のコレクションのほうから見てしまうのですが、それではいろいろと取りこぼしてしまうところがあることを実感しております。まさに長尾雨山が残した業績というのは、今回のような共同研究にふさわしいものであることを、深く認識することができました。あらためてお礼を申し上げたいと思います。

松村：呉先生、ありがとうございます。呉先生は、長尾雨山のご子息であられる長尾正和氏が雨山の資料を大切に整理して保管されていたのですが、正和氏がお亡くなりになった後、ご遺族が、ぜひ公的な場所でご活用いただきたいということで、京都国立博物館に保管を依頼されています。今、呉先生がおっしゃったように、寄贈の作業を進めてくださっているのですが、学術的観点から、どうしても必要なものは長尾家の了解を得た上でお見せしましょうということで、呉先生のおかげで、長尾雨山の肉筆資料等を拝見することができて、研究を進めることができております。また、呉先生は、長尾雨山関係資料の総目録を作られておられまして、既に冊子になっているのですが、先ほどお話を伺いますと、さらなる確認作業を今、進めておられるということで、長尾雨山研究においては最も重要な役割を果たしておられる方です。本当にありがとうございました。

申し遅れましたが、今日のこのシンポジウムは録音をさせていただいております。この後、文字起こしをさせていただきまして、『人間生活文化研究』という大妻女子大学人間生活文化研究所の電子ジャーナルに掲載したいと思っております。これから来聴者の方々にご発言をいただきますが、もし、掲載は控えてほしいという方がいらっしゃいましたら、言っていただければ、その部分は削除するようにいたします。先に申し上げるべきところ申し訳ございません。

今日お越しの方、お一人ずつご感想をいただければと思います。いかがでしょうか。ご感想でもご質問でもいいのですが。

齋藤：感想を言わせていただきます。長尾雨山という名前は知っておったんですけども、具体的にたくさんの資料とそれから共同研究で、今日、いろんな角度からご紹介いただいて大変勉強になりました。非常にありがたかったです。

松村：どうもありがとうございます。

貴家：私は篆刻をやっておりまして、こちらにおられる利根川さんと同じ社中で何年かさせていただきまして、非常に、篆刻と同時に、中国の呉昌碩さんはじめ、いろんな書画いうものに対して、すごく目を開かれたというふうに思っております。そのことによって、今日、こういう催し物があるというのを、利根川さんから内容をいただいて楽しみにやってきました。本当に、先生はじめ、皆さんのご説明が的確に、なおかつ、感じられるような内容だったと思っております。そういう意味でも、本当に今日はありがとうございました。

松村：どうもありがとうございました。

黄：私は感想なんですけど、今日の長尾雨山先生と呉昌碩の交友関係が、大変勉強になりました。以上です。

松村：ありがとうございます。では、高塚さんお願いします。

高塚：大妻女子大学博物館の学芸員の高塚と申します。展示の作業のほうには関わらせていただいて、本当にこういった機会に、貴重な資料に実際に触れて、軸を掛けたり、さまざまな雨山に関わる、こういうの、政治家であるとか文人、経済界の方たちの、名だたる方の直筆のものを取り扱えることができて、大変、貴重な機会であったと思います。また、こういった雨山のネットワークの展示だったわけですが、大学博物館が新しい、こういった研究のネットワークを構築していく、こういった場が一助になれば、よろしいなと思います。

松村：どうもありがとうございました。では、先ほど松田先生からご質問が出されましたので、それにお答えするようにしたいと思います。松田先生、もう一度、ご質問お願いいたします。

松田：先ほど戸田山先生からも高島屋百貨店の役割についてお話がありましたが、長尾雨山に対する金銭的なものを含めどのような支援があったの

でしょうか。特に上海滞在中の資金が気になりました。

松村：長尾雨山の経済的支援ということですね。どなたかお答えいただける方、いかがでしょうか？ では、私の方から。雨山は、当時中国最大の出版社であった商務印書館に勤務するため上海に渡りました。よって、上海滞在中は、商務印書館からの収入がありました。先ほどご紹介した雨山の五男である長尾正和氏が、「長尾雨山」という文章を京都の彙文堂書店の目録である『冊府』に連載されています。その中に、帰国後の雨山は、「印書館の寡なからぬ俸給も絶えた」とありますので、上海滞在中は、商務印書館から「寡なからぬ」給与を得ていたことがわかります。ただ、帰国後は、「全く一介の布衣」で、収入はなかったとあります。ですから、雨山は家塾を開き、書画の揮毫をして生計を立てています。ギャラリートークで申しましたように、毎日新聞社長の本山彦一が雨山を漢詩壇の選者にしたのも経済的支援の意味合いもあったようです。また、雨山は漢詩の会を開いて指導もしていますが、これは私的にやっています。ですから、帰国後の雨山に関しては、公的支援というようなものはないと思うのですが、呉先生いかがでしょうか。

呉：ないと思います。

松村：私もそう思います。

松田：そう考えますと、毎日新聞社長の本山彦一の詩（展示）にもあったように、非常にシンプルな生き方を貫かれた方だ、と改めて痛感しました。二点目の質問ですが、実際に書画をご覧になった先生方にお伺いできればと思います。書画には直接書かれてないかもしれませんが、長尾雨山は中国という国に対して、どのような認識を持っていたのでしょうか。この時代に国際的なネットワークを作っていたこと自体が大変素晴らしいことであり、もう少し影響力があれば、時局も変わったのではないかと個人的には考えます。長尾雨山がどのような中国認識を持っていた、その認識が他の文人たちにどのような影響を与えたのでしょうか。恐らく限界もあったのではないかと推測されます。その辺りをお聞かせいただけたらと思います。

松村：これはいかがでしょうか？ どなたか？ では、また私が話させていただきます。これについて、最もわかりやすいのは雨山と極めて親しく交

流した犬養毅だと思います。犬養毅は、満州国の宗主権を中国に返し、日本と対等な立場で協力していくという主張をしました。これが原因となって5.15事件で青年将校に銃撃されることになってしまうんですね。これ、当時の状況からすると非常に勇気のいる主張でありまして、なかなかできることではないと思います。どうして犬養木堂はこういったことができたのでしょうか？それは、やはり中国の書画に対する尊重なのではないかと、私などは考えております。『犬養木堂書簡集』というのがありまして、『犬養木堂伝』の編著者でもある鷺尾義直が、犬養の書簡をまとめて出版しております。これは絶版ですが、その後、岡山県郷土文化財団が2冊本として出してくれています。それを読んでまいりますと、半分は政治のことについての書簡なんです。もう半分は書画のことについての書簡なんです。ですから、犬養は本当に半分、政治家で、半分、文人だったのでしょうか。しかも、文人として、中国への憧れを強くにじませています。これは、この当時の「書画文墨趣味ネットワーク」に連なる人に、共通することです。どうして、中国のものを尊重するのでしょうか？それは、やはり書画の本質は中国にあり、中国から伝わったものであるという考えがあるからだと思います。江戸時代は鎖国をしておりましたので、清朝とは細々としたやりとりはあったのですが、それでも全面的に国交があったわけではありませんので、中国の最新の学問が伝わっていませんでした。そういった中で日本の漢学者たちは概ね明代の学問をしていましたが、リアルタイムの清朝でおこなわれている学問に、強い興味と憧憬を抱いていました。そのような中で雨山が帰国して、中国の金石学に基づく最新の学問を日本に伝えたのです。その最先端にあったのが呉昌碩で、呉昌碩は、古文学派経学の学者であり、詩書画印四絶の文人でもありました。かくして、雨山が呉昌碩を紹介するや、日本の漢学の素養がある人は、この人こそが文人だという思いを持った。ですから、そういった中国の最新の学問や文人に対する憧れが中国尊重につながり、そして中国ともうまくやっという、そういった思いがあったのだと考えます。ただ、先生ご指摘のように、そこには限界があって、どうしても当時の軍部の考え方のほうが先に立ってしまって、不幸な結果になってしまったということじゃないかなと思っています。

戸田山：私もお聞きしたいことがあります。長尾雨山がしばらく上海にいて、向こうの教科書の作成にも協力しているということですが、コミュニケーションに際して何語を使っていたのでしょうか。筆談はできたと思うのですが、実際の会話はいかがでしょうか？

松村：中国語で話していたみたいです。

戸田山：北京官話の発音ですか。

松村：はい。もちろん、最初は雨山といえども、中国語はできなかったんですが、雨山は中国に行った後、割と短期間に自分一人で中国の詩人たちを招いて、詩会をやったりしているんです。こういった時に、筆談だけでは難しいと思います。これ、感覚的にわかるんですが、漢文に精通している方は発音のコツさえわかれば、ちょっと文語的かもしれないんですが言葉でやりとりできるようになりますので、雨山もそういった形で中国語で交流をしていたのではないのでしょうか。

戸田山：なるほど。ありがとうございます。

松村：よろしいでしょうか。

戸田山：教科書の件について、お伺いしたいことがあります。1905年、光緒31年に、国文教科書が中国で出されて、そこでは日本人が招聘されて編集に関わったということが明記され、それが売り物であったということを先ほどのご説明でお伺いして、面白いと思いました。日本を一つの参照事例として近代化を進めるという、清朝末期にいろいろな分野で行われていたことの一環として理解できると思うのですが、この教科書が1924年、中華民国13年に、改定された際には長尾雨山の名前はなくなっていて、そこには日清戦争後の反日感情が作用したのではないかと、旨、パネルの解説で書いてあったと思います。

ただ、1924年は日清戦争の30年近く後ですから、後は後なのですが、そもそも長尾雨山が招かれて教科書の編纂に携わり、また編者として名前が掲載された教科書が出たのが1905年ですから、日清戦争後10年経っている時期なわけですね。そうだとすると、日清戦争が直接関係しているのではなく、むしろその後の第一次世界大戦のさなかに日本が対華21カ条要求を出したことなどが背景にあるのではないのでしょうか。これを受けて、1919年のことですが、五・四運動という日本の介入に抵抗する大規模な運動が起きますよね。つまり、これは中華民国成立後、さらに第一次世界大

戦後に、日本が中国への実質的な圧力の行使を強めていくさなかで起きた反応によるものではないかと思った次第です。その辺り、もしかすると先生のお考えもあるかと思いますがいかがでしょうか。

松村：ぜひ木村先生に。

木村：先生のおっしゃる通りだと思います。日清戦争以降ということです。説明が不十分で申し訳ありませんでした。

松村：ありがとうございます。私も1894年の日清戦争以降の反日感情がずっと続いていたということじゃないかと思います。その後も日本は、1904年から翌年にかけての日露戦争へ突き進んでいきますので、そういった過程の中で反日感情がどんどん高まって行くという、そういった時期じゃなかったかと思います。『最新国文教科書』の初版が出たのが1904年で、今回の展示品は翌1905年の刊行です。この段階までは、小谷重と雨山の名前が封面にありましたが、1906年からは消されています。以下、樽本照雄『初期商務印書館研究増補版』（2004 清末小説研究会）により、当時の経緯を見ておきましょう。『最新国文教科書』の出版元である商務印書館は、1903年11月19日に日本の金港堂書籍株式会社と合併し、小谷や雨山もこれにともなって商務印書館に入り、わずか数ヶ月で『最新国文教科書』を作るのです。だから、小谷や雨山は功労者なわけで、封面に名前が出るのは当然のことでした。ところが、前述のように、1906年からは消されており、当時の反日感情の厳しさがわかります。また、1912年の中華民国成立と同時に、商務印書館の社員であった陸費逵（陸費は複姓）が商務印書館を飛び出して中華書局という出版社を起こすんです。これも今、大きな出版社として残っておりますが、この中華書局が「完全華商自辦（完全中国資本経営）」を掲げて教科書を出し、日本企業と合併している商務印書館を攻撃し、シェアを奪って行くわけですね。そんな中で、商務印書館は、1914年1月6日、金港堂との合併を解消し、雨山もこれに伴って、日本に帰国することになるんです。

雨山のたどった道は非常に困難な道で、雨山個人は中国に対する憧憬といいますか、または尊敬といいますか、そういったものを非常に強く持っていて、中国でも常に中国の方を立てて過ごしてたんですが、やはり世界的な大局において、当時

の日本は中国の人たちにとってみると敵国であり、そんな中に雨山も、どうしても含まれてしまったということではないかなと考えております。

戸田山：ありがとうございます。

松村：その他、ご質問、コメントなどございませんでしょうか。では、よろしいでしょうか。本日は、皆さんお忙しい中ご参集くださいまして、また貴重なご意見も賜りまして、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。これで終了にさせていただきます。ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

なお、シンポジウム当日ご欠席であった共同研究者で大妻女子大学人間生活文化研究所准教授の下田敦子氏より、「人間生活文化研究所の研究支援事業を活用したモジュールとして」と題し、以下のようなコメントをいただいた。

下田：このたびの『長尾雨山とその交友』と題した大妻女子大学博物館特別展が1月14日から2月28日まで同博物館で開催された。この会期中の2月20日には、このテーマでシンポジウムが開催されたが、副題として『大学博物館の活性化に向けて』が添えられている。

特別展の会期はもとより、シンポジウムに際しては多数の関係者が参加し、充実した議論が行われた。この研究の深化とアウトリーチ活動の両立を目指し、さらに大学博物館の活用と活性化という実に多目的の内容をもったプロジェクトが今回のこの研究モジュールの特徴である。

すでにご案内のように、人間生活文化研究所は多くの特徴的な学内における研究活動支援を行っているが、松村教授はまず専任教員が行う「戦略的個人研究費」を獲得されて『長尾雨山とその交友研究(研究課題番号:N2416)』を遂行された。ついで、その成果を次なる段階のプロジェクトとして育てるために、やはり人間生活文化研究所が行う「共同研究プロジェクト」を大学博物館と協働する形で実施された。その成果の可視化を行うために今回の特別展を実現した。さらに同研究課

題をシンポジウムとして学問的にも進化させ、あわせて研究成果のアウトリーチを実現されたのである。

こうした一連の研究活動の流れは、かつてより本研究所が重点的に取り組んできた、大学における研究活動のPDCA活動を、一つの典型的なモジュールとして実現したものであるといえよう。

こうしたモジュールが、本学で行われる研究活動のいたるところで実現できれば、「研究の大妻」は一層充実したものになるに違いない。

発言者紹介(発言順、敬称略)

松村茂樹 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

木村 淳 大妻女子大学非常勤講師

利根川千枝子 大妻女子大学大学院国際文化専修博士後期課程

廣野朱音 大妻女子大学大学院国際文化専修修士課程

青木俊郎 大妻女子大学博物館学芸員

松田春香 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科准教授

渡邊顕彦 大妻女子大学比較文化学部比較文化学科教授

戸田山祐 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科専任講師

呉 孟晋 京都大学人文科学研究所准教授

齋藤英男 元武蔵野学院大学教授

貴家 香 大和市書道連盟理事、元謙慎書道会評議員

黄 栩柔 大妻女子大学大学院国際文化専修博士後期課程入学予定

高塚明恵 大妻女子大学博物館学芸員

下田敦子 大妻女子大学人間生活文化研究所准教授

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2416)「『長尾雨山とその交友』展の開催—大学博物館の活性化に向けて」(研究代表者:松村茂樹)を受けたものです。

Abstract

From January 14 to February 28 2025, the special exhibition “Nagao Uzan and his friends: People in the calligraphy, painting, and literary ink culture network” was held at the Otsuma Women’s University Museum. This exhibition was organized by the Otsuma Women’s University Museum with support from the 2024 Joint Research Project of the Institute of Human Culture Studies, titled "The Exhibition of Nagao Uzan and his friends: Toward the revitalization of university museums" (Project number: K2416, Project leader: Shigeki Matsumura). In conjunction with the exhibition, a gallery talk was held at the museum on February 20, 2025 (Thursday) from 1:00 PM to 2:00 PM, followed by a symposium from 2:30 PM to 4:00 PM in the G311A Active Lounge at Otsuma Women’s University.

During the symposium, participants shared their reflections on the exhibition, including their impressions of the gallery talk and the explanatory video produced with the cooperation of the Otsuma Women’s University Media education development group, relating these to their own research. A discussion including the audience followed. This report is a record of that event.

(受付日：2025 年 6 月 25 日，受理日：2025 年 7 月 22 日)



松村 茂樹（まつむら しげき）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

プロフィール：

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士（文学，筑波大学）．ボストン大学客員研究員，東京大学非常勤講師などを歴任．専門はアジア太平洋国際交流論，サーバントリーダーシップ論．

主な著書と最近の論文：

『近代中国の文化人と書』（研文出版）『書を探る』（アートダイジェスト）『呉昌碩談論』（編・柳原出版）『呉昌碩研究』（博士論文・研文出版）『「書」を考える』（二玄社）『呉昌碩と日本人士』（「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所）『書と画を論じる』（研文出版）『言語文化〔文部科学省検定済教科書高等学校国語科用〕』（共著・文英堂）『古典探究〔文部科学省検定済教科書高等学校国語科用〕』（共著・文英堂）『現代中国語圏映画研究―第五世代と第六世代』（「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所）『書の語られ方 中国篇―書論通観 1』（「大妻ブックレット 11」日本経済評論社）『書の語られ方 日本篇―書論通観 2』（「大妻ブックレット 12」日本経済評論社）『長尾雨山研究』（研文出版）

「日本における「サーバントリーダーシップ」導入―「タテ社会」を変える試み」（『コミュニケーション文化論集』第 20 号）「「サーバントリーダーシップ」の本質」（『人間生活文化研究』No.33）「「洗足」について―「サーバントリーダーシップ」の本質（2）」（「大妻女子大学紀要一文系」55 号）「「2017 年 5 月 30 日」以後の大学教育―大学教員としての対応」（『コミュニケーション文化論集』21 号）「「支配するのではなく，模範となちなさい」―「サーバントリーダーシップ」の本質（3）」（『人間生活文化研究』No.34）「グリーンリーフ「サーバントリーダーシップ」とキリスト教的理解」（「大妻女子大学紀要一文系」56 号）『ザ・ビートルズ：Get Back』に見るリーダーシップ」（『コミュニケーション文化論集』22 号）「「自分を高くする者は低くされ，自分を低くする者は高くされる」―「サーバントリーダーシップ」の本質（4）」（「大妻女子大学紀要-文系-」57 号）「ディズニー映画に見る女性表象（1）―『白雪姫』から『シンデレラ』へ」（『コミュニケーション文化論集』23 号）